題」を提供する。戦後史の記述も、アメリカ側からは「共産主義の脅威から自由世界を守るために戦った物語」、ソ連側からは「帝国主義の搾取と抑圧からの解放を求めて戦った物語」という主題のもとに記述されるであろう。

その点、冒頭の文章記述は、アメリカ側からの物語でもなければ、ソ連側からのものでもなく、一応中立・客観的な見方を提供しているとみられるかも知れない。しかしそれでも、物語の主題はあるはずである。もし万一書き手が主題を意識せず記述した文章でも、読者の側から主題をつくりあげてゆく。読者は社会事象を語った文章記述を読むとき、必ず個々の記述内容を、場面と登場人物と行為からなる一連の物語として再構成して事象を理解する。そして、戦後の世界は結局どういう時代だったのかというように、物語の主題を自分なりに読み取り、解釈しようとする。それが新聞記事など、社会事象に関する文章記述の読み方であろう。

では読者は、この記述からどんな主題を読み取るであろうか。言い換えれば、この記述によると、戦後の世界とはどんな時代だと読者はとらえるのか。たとえば次のようなとらえ方が、ここから引き出されるかも知れない。

A　戦後はアメリカとソ連が軍事力で張り合う冷戦の時代であった。

B　戦後は大規模な戦争はなかったが、平和とはいえない時代であった。

これらはいずれも読者なりに解釈した物語の主題である。しかしこのように主題を解釈すると、読者には新たな疑問が起こるはずである。

A　アメリカとソ連は核戦争の危機にもかかわらず、「張り合った」といわれるが、そこまでして「張り合う」のはなぜであろうか。

B　ソ連の解体によって冷戦が終ったことは平和といえるのだろうか。

二大国のうち、ソ連の武力支配がなくなっただけであって、アメリカの武力支配は続いていることになるのではないか。

これらの疑問は、戦後の世界をとらえる上で重要な側面である。Aはイデオロギーの対立をどう理解するか、Bは二大国以外の国々、とりわけ第三世界の存在をどう理解するかという問題に発展する。いずれも冒頭の文章記述が言及していない側面である。

このように文章記述を読み、読者なりに主題を解釈してゆくと、読者の読みは書き手の記述を超えてゆく。読者は書き手の記述を踏み台にして、自分の探究を始めてゆく。このような読者の独立こそ、メディア・リテラシーを意識した文章記述の見方を指導する目標といえるし、その独立のきっかけとしての、記述の「意味」「筋」「主題」の読みこそ、指導の三つの大きなポイントであるといえる。

〈山口大学教育学部助教授〉

誌上検証

メディア・リテラシーの必要性を考える

「太平洋戦争」の記述対比—書き手によってここまで違う？

馬居　政幸

一　はじめに

編集部の依頼書に「日韓の教科書比較により、同じ問題に対する記述の違いの誌上検証から、メディア・リテラシーの必要性の紹介を」とあった。

「メディア・リテラシー」とは「媒体＝メディア」を通じて「情報」を交換する際に、「送り手」と「受け手」に必要となる「読み書き能力＝リテラシー」。ただし〝読み書き〟とあるように、本来「文字」というメディアに固有な情報交換能力を意味するリテラシーを〝メディア・リテラシーの必要性〟と一般化する前提には、次の二つの社会的条件の変化があると考える。

一つはマルチメディアに代表されるメディアの多元・双方向化、もう一つは衛星放送やインターネットに代表される情報のボーダーレス化。それは単にキーボードとディスプレイの読み書き能力に止まらず、本に代表される旧来の媒体の交換能力をも変化させる。

その意味で本稿の目的は、太平洋戦争に関して何を教えることが正しいかという歴史教育上の課題を検討することではない。教科書の内容の正誤を歴史学的に検討することでもない。

メディアの多元・双方向化と情報のボーダーレス化が進行する社会に生きる人間に必要な情報交換能力＝リテラシーを、〝教科書という旧メディア〟〝太平洋戦争に関する情報〟、〝日本と韓国との間にある差異＝境（ボーダー）〟という三つのアイテムにより解読することが本稿の課題である。

なお、韓国は中学・高校で国史を教え、その教科書は一種（国定）で、中学の内容は高校に含まれるため、本稿では一九九〇年発行の高等学校『国史』下巻（近現代史）を参照する。翻訳文は全て『対訳　世界の教科書にみる日本　韓国編』（国際教育情報センター）による。また、日本の歴史教科書は中・高ともに多数あるが、一般性の観点から義務教育（中学）教科書を用いる。

二　韓国の太平洋戦争

私は本稿に先立って、韓国の文部省（教育部）より派遣され大阪の韓国教育院で在日韓国人の教育に従事されている宋在鴻先生に韓国の教科書における「太平洋戦争」の記載内容の調査を依頼した。ところが宋先生の返事は、太平洋戦争のことなどほとんど書いていない、というものであった。

宋先生の指摘では太平洋戦争という言葉が『国史』に出てくるのはたった一箇所、

それも「対日宣戦布告と韓国光復軍の活躍」という項目の一部にすぎない。長文だが誌上検証という意味でこの項目の翻訳文を紹介する。（該当部分を点線で囲ったのが図1）

「対日宣戦布告と韓国光復軍の活躍　大韓民国臨時政府は中国の国民党政府とともに数回にわたって移動したが、重慶に定着した後、政府体制を本土修復のための臨戦態勢に整備した。そして散らばっていた各地の武装勢力を臨時政府傘下の韓国光復軍に統合しながら軍事力を強化した。／太平洋戦争が起こると、臨時政府はただちに対外活動を繰り広げて、対日、対独宣戦布告文を発布し、韓国光復軍を連合軍の一員として参戦させた。そして韓国光復軍はミャンマー、インド戦線にまで派遣されて、英国軍との連合作戦を遂行したりもした。／対日戦に参戦した韓国光復軍は直接戦闘に参加すること以外にも捕虜の尋問、暗号文翻訳、宣伝ビラの作成、懐柔放送などの心理作戦に参加した。／韓国光復軍は中国と東南アジア一帯で対日戦に参戦しながら、他方、祖国の光復を自分たちの手で勝ち取るために、直接国内進入作戦を計画したりもした。／韓国光復軍は総司令官である池青天（チ　チョンチョン）、支隊長の李範奭（イ　ボンムク）などを中心に、中国に駐屯していた米軍と連合して、国土修復作戦の任務を受けた国内挺進軍の特殊訓練を実施し、飛行隊まで編成した。しかし、1945年8月15日、日本が無条件降伏することによって、韓国光復軍はその年の9月に実行しようとしていた国内進入計画を実現できないまま光復を迎えることになった。」

図1

大韓民国臨時政府とは、一九一〇年に国権を日本に奪われた（日本では韓国併合）後、一九一九年の三・一運動を契機に上海に樹立した臨時政府。光復軍とは、日本から独立するための解放軍。韓国では日本の敗戦の日が「光復日」という名の独立記念日である。したがって、連合国の一員として日本と戦った戦争が、韓国の『国史』における太平洋戦争の位置づけである。

では日本の場合はどうか。

三　日本の太平洋戦争

次に紹介するのはA社の中学校歴史の教科書（平成六年、以下『A』と略す）の「太平洋戦争」という項目名のもとに記述された部分の一部である。

「1941年（昭和16年）12月8日、日本は、ハワイの真珠湾のアメリカ軍基地を奇襲する一方、マレー半島に上陸し、太平洋戦争が始まった。日本軍は短時間でホンコン（香港）、マニラ、シンガポールを占領し…略…東南アジア全域を支配した…略…やがてアメリカの強大な戦力が、日本軍に打撃を加え始め…中略…日本本土の空襲が始まった。爆撃の対象は、軍事施設や工場ばかりでなく、住宅地域にまでおよび…略…おもな都市が焼け野原になった。」

図2

いうまでもなく、日本の教科書における太平洋戦争は連合国のアメリカと戦い敗れた戦争。ということは、以上紹介した日韓の教科書記述から判断する限り、日本と韓国は太平洋戦争において互いに戦った国になる。

だが『A』には、韓国と戦ったことはどこにも書かれていない。それどころか次頁（図2）には、本文に「戦時下の朝鮮人」という項目が設けられ、『「朝鮮神宮」と参拝させられる朝鮮の学生たち』『朝鮮人「日本兵」』というキャプションと説明文付きの写真が掲載され、日本が朝鮮の人々に対し創氏改名などにより日本人化を強制し日本軍に召集されたと記されている。加えて、このような記述は『A』のみでなく他社の教科書も同じである。

韓国の教科書には戦った相手国と記され、その相手国の日本の教科書には自国の兵士として召集したと記されている。このようなことがなぜ生じるのか。朝鮮と韓国は異なる国であり、日本が支配したのは朝鮮であって韓国ではなかったのか。それなら『国史』に記された光復軍の存在が虚偽になる。日本の教科書が誤っているのか。だがこの点での韓国からの指摘はない。

ということは、両国の教科書の矛盾する記述は、歴史学や歴史教育の問題ではないということであろう。メディア・リテラシーの出番である。

四　国家の歴史

表1・表2から韓国の近代史は自国の近代化への努力とそれを武力で侵略し国権を奪った日本から独立する戦争の歴史であることが理解できる。太平洋とはその日本と連合国との戦争である以上、当然「国外の独立戦争」と位置づけ、連合国の一員とし

表1　韓国高等学校用歴史教科書『国史』（下巻）

Ⅰ．近代社会への胎動（1）
　1．近代社会への志向
　2．政治体制の変化
　3．経済構造の変化と社会変動
　4．文化の新気運
Ⅱ．近代社会の発展（69）
　1．近代社会の展開
　2．近代意識の成長と民族意識の展開
　3．近代の経済と社会
　4．近代文化の発展
Ⅲ．民族の独立運動（127）
　1．独立意識の成長と3・1運動
　2．大韓民国臨時政府と独立戦争
　3．経済・文化的抵抗運動
　4．民族文化守護運動
Ⅳ．現代社会の展開（169）
　1．民主政治の発展
　2．経済成長と社会の変化
　3．現代文化の動向　　（　）内は頁

表2　韓国教科書『Ⅲ―1．2．3．4.』(127～168)

Ⅲ．民族の独立運動（127～155）
　単元概要　年表（128）
1．独立意識の成長と3・1運動（129）
　概要　　研究課題
(1)民族の受難（130～131）
　国権の被奪　間島と独島　朝鮮総督府
　憲兵警察統治　植民地支配体制の変化　民族抹殺統治
(2)抗日独立運動の推進（133～134）
　抗日結社の組織　独立運動基地の建設
(3)3・1運動（135～138）
　3・1運動の胎動　3・1独立宣言
　3・1運動の拡散　3・1運動の意義

2．大韓民国臨時政府と独立戦争（139）
　概要　　研究課題
(1)大韓民国臨時政府の活動（140～141）
　大韓民国臨時政府の樹立　臨時政府の憲法
　光復運動の展開

写真　①大韓民国臨時政府舎（1919）
　　②大韓民国臨時政府の要人たち
脚注　①大韓民国臨時政府の憲法（4行）
資料　②大韓民国臨時憲章宣布文

(2)国内の独立戦争（142～144）
　武装抗日闘争　愛国志士たちの活動
　6・10万歳運動　光州学生抗日運動

写真　①義挙直後連行される尹奉吉義士
　　②光州学生の抗日運動を報道した当時の新聞

(3)国外の独立戦争（145～155）
　独立戦争の方向　鳳梧洞，青山里戦闘　独立戦争の試練
　韓国光復軍の結成　対日宣戦布告と韓国光復軍の活躍

写真　①鳳梧洞戦闘現場（現中国吉林省図們市）②金佐鎮
　　③訓練中の韓国光復軍　韓国光復軍の査閲式
　　④大韓民国臨時政府の対日宣戦声明書
地図　①武装独立軍の対日抗戦
脚注　①間島地方の日本軍による虐殺（2行）

3．経済・文化的抵抗運動（151）
　概要　　研究課題
(1)民族経済の侵奪（152～154）
　土地の略奪　産業の侵奪　食料の収奪　兵站基地化政策
(2)経済的抵抗運動の展開（155～157）
　小作争議　労働争議　民族企業の成長　物産奨励運動
(3)社会運動の展開（158～160）
　新幹会と槿友会　青少年運動　文盲退治運動
4．民族文化守護運動（161）
　概要　研究課題
(1)国学運動の展開（162～164）
　植民地化政策　ハングル振興運動　韓国史の研究
(2)教育と宗教活動（165～166）
　民族教育　宗教活動
(3)文学と芸術活動（167～168）
　文学活動　芸術活動

て戦う戦争となる。たとえ日本の教科書にあるように、日本兵の中に日本に支配された国内に住む人達がいても、それは日本（日帝）に強制されたもの、大韓民国の国史ではない。ただし、この日本人化を強制された歴史自体は太平洋戦争という独立戦争の文脈ではなく、「民族の受難」（Ⅲ―1―(1)）という文脈の中の小項目「民族抹殺統治」においてとりあげられる。

そしてこのような歴史を大韓民国の国史として明記し、それを国民に文字通り〝正しく教える書（メディア）〟が『国史』である。この意味で、『国史』は多元・双方向化やボーダーレス化を前提としたメディアではない。

では日本の教科書はどうか。

五　記号の世界へ

まず表3と表4から、日本の教科書の章や節の構成が、ネーミングの差を除き、頁数も含めほとんど同一であること。また表5と表6から、小項目も同様の傾向だが、写真、地図、脚注、コラム、グラフ等の用い方に差があることがわかる。「送り手」から「受け手」に伝達する情報は共通だが、表現方法で独自性（差異化）を強調、これが日本の教科書の特徴といえる。このことはメディア・リテラシーの観点から重要である。理由は三つ。

一つは「メディアは事実をつくる」という観点。表3～6は、日本の教科書が太平洋戦争を①第2次世界大戦という世界史の立場、②アジア各国に対しては加害の立場、③日本の国民にとっては被害の立場から記述していることを示唆している。一つの教科書に三つの立場（文脈）に基づく歴史上の事実認識（史観？）が混在している。一元的（単一文脈）に記述された韓国の『国史』との間にズレを引き起こし、日本という国家と国民の立場を曖昧＝多元的？　する原因である。

しかし、このような日本の教科書の特性は〝メディアが事実をつくる〟というメディア・リテラシーの学習教材としての〝可能性〟を秘めたものである。そしてこのことはメディア・リテラシーの第二の観点である「メディアは全てを記号にする」と結びつく。

韓国の『国史』における「太平洋戦争」という「文字」は、北緯三八度線を境に内戦状態にある〝北韓〟に対する自国の正当性を証明する「記号」、日本の教科書の「太平洋戦争」は三つの立場を使い分けるための「記号」といえる。これは、メディアとは事実を記号に還元し一定の意味とセットにした情報として伝達する装置、ということを意味する。どのような情報も事実と意味が組み合わさった記号の集積として理解すること、これがメディア・リテラシーの第二の観点である。

そしてこれが「意味は『送り手』ではなく『メディア』と『受け手』の『間（あいだ）』に創られる」という第三の観点につながる。

先に日本の教科書の立場を曖昧と指摘したが、その際に多元的という文字に？を付加した。理由は二つ。一つは「書き手＝情

表3　日本の教科書A目次（近現代史部分）

写真・資料のページ（173）
第6章　近代ヨーロッパとアジア（177）
　1．市民革命
　2．産業革命
　3．欧米諸国の発展とアジア侵略
　4．くずれゆく幕府政治
　5．開国と江戸幕府の滅亡
第7章　近代日本の歩み（209）
　1．明治維新
　2．自由民権運動と立憲政治の始まり
　3．日清・日露戦争と近代日本
　4．近代産業の発展と教育・文化
第8章　二度の世界大戦と日本（247）
　1．第一次世界大戦とアジア
　2．第一次世界大戦後の日本の社会
　3．世界恐慌と日本の中国侵略
　4．第二次世界大戦

表4　日本の教科書B目次（近現代史部分）

第6章　国際情勢の変化と政治のいきづまり（177）
　第1節　近代ヨーロッパ世界の形成
　第2節　近代ヨーロッパとの接触
　第3節　開国と幕府の滅亡
　　◇横浜開港資料館へいってみよう
第7章　近代日本の歩みと国際関係（205）
　第1節　明治維新
　第2節　自由民権運動と国会開設
　第3節　日清・日露戦争とアジアの情勢
　第4節　近代産業の発展と文化
　　◇女史工員のつらい労働
第8章　二つの世界大戦と日本（251）
　第1節　第1次世界大戦と国際関係
　第2節　大正デモクラシーと大衆文化の成立
　第3節　激動する世界と日本
　第4節　第2次世界大戦と日本
　　◇戦場となった沖縄
　　◇いまも残る原子爆弾の爪あと

表5　日本の教科書A『第8章　4　第2次世界大戦』(276〜288頁　計13頁)

〔ヨーロッパで戦争が始まり，日本はアメリカとの対立を深める。〕
第二次世界大戦の始まり　日本の南進政策　日米対立の激化

写真　①オランダを侵攻するドイツ軍　②空襲におびえるイギリスの子どもたち
地図　①世界地図　②ヨーロッパ地図
脚注　①ソ連ポーランド侵攻（2行）　②大東亜共栄圏（2行）

〔日本はアメリカ，イギリスなどに対し，太平洋と東南アジアでも戦争を始める。〕
太平洋戦争

写真　①新聞記事「日本軍の奇襲」(説明)　②ビルマの油田を攻撃する日本軍
脚注　①大東亜戦争の命名（2行）　②東京空襲の被災家屋と被災者数（2行）

〔太平洋戦争の時期の東南アジアや朝鮮の人々と，国民の生活。〕
日本占領下の東南アジア　戦時下の朝鮮人　戦争と国民生活

写真　①軍票（説明）　②住民の徴発（説明）
③「朝鮮神宮」と参拝させられる朝鮮の学生たち（説明）　④銃剣術訓練（説明）
⑤朝鮮人「日本兵」(説明)　⑥集められた寺院の鐘（説明）
脚注　①シンガポールとマレーシアの日本軍による死者の数（3行）

〔日本が降伏して第二次世界大戦は終わる。〕
沖縄での戦い　イタリアとドイツの降伏　日本の敗北

資料　①戦場となった沖縄の人々の体験（「沖縄県史　沖縄戦記録」より）
グラフ　①終戦直後の沖縄の人口
写真　①いっしゅんにして廃墟となった広島（説明）　②解放を喜ぶ朝鮮の人々
脚注　①ヤルタ協定について（3行）

◇テーマ学習のページ
「銃後の子どもたち」　問いと活動

写真　①教室も軍需工場に（説明）　②戦う「少国民」(説明)　③遊びの変化（説明）

◎第8章の学習をふりかえって
（年表と写真と要約文の組み合わせ）

報の送り手」の立場は一元的であること。日本は韓国と異なり分断国家ではない。だが冷戦を反映するイデオロギーを内部に持ち、その対立の場が歴史教科書であった。その結果が〝複数の立場⇩イデオロギー⇩文脈〟での記述。もう一つは、教科書の競争原理。内容の自由度が挟いため、商品としての差異化を表現様式に求めた結果として多元化が生じたこと。

理由はともあれ、内容は共通、表現は多様という日本の教科書の特性が、教科書一頁の中に、三つの文脈の歴史的事実の解釈を文字・写真・資料など質的に異なるメディアによる〝モザイク的な知識⇩記号⇩情報〟として表現する世界を創造したことは事実。その結果、教科書というメディアが伝達する情報の文脈（記号に付加した意味）の解釈権は「受け手」の側にうつる。ただし、教科書の場合「受け手」である学習者を媒介する教師が一元化すれば、情報は多元化しない。それ故、情報の一元的伝達を重視する社会では「文字」のリテラシーのみが問題になる。他方、現代のメディアと情報の特性が、多元・双方向化とボーダ

表6　日本の教科書B『第8章 第4節 第2次世界大戦と日本』(282〜294頁 計13頁)

1．第2次世界大戦のはじまり
◇学習課題
第2次世界大戦はどうしておこったか　日独伊三国同盟
日米の対立　太平洋戦争　コラム アンネ＝フランク

年表　①1939〜1945
地図　①ヨーロッパ　②世界（学習問題付き）
写真　①廃墟となったスターリングラード　②ノルマンディ上陸作戦
③ヤルタ会談の指導者たち
④ビルマ（現在のミャンマー）の油田を攻撃する
グラフ　①日本とアメリカの生産力の比較
脚注　①連合国の国名（2行）

2．戦争中の苦しい生活
太平洋戦争が国民生活に与えた影響
☆コラム **集団疎開した子供たち　コラム 日本に占領された国々**

資料　①配給券
写真　①女学生の軍事訓練（説明）
②エルベ川（ドイツ）で握手をかわすアメリカ軍とソ連軍の兵士
グラフ　①第2次世界大戦での犠牲者（質問）

3．大戦の終わり
イタリア・ドイツの降伏　悲惨な沖縄戦　日本の降伏

写真　①焼け野原になった東京（説明）

◇**戦場となった沖縄**
☆コラム **苦しくなる食料捜し**（『那覇市史』資料篇より　体験談）
考えてみよう

写真　①沖縄にせまるアメリカ軍　ひめゆりの塔（説明）
②アメリカ軍にとらえられた少年兵

◇**いまも残る原子爆弾の爪痕**
☆コラム **被爆者の体験談**（広島文化センター『平和の光りを』より）
考えてみよう

写真　①壊滅した広島と8時15分でとまった時計（説明）
資料　①被爆者の遺品（説明）
グラフ　①原子爆弾による犠牲者数

〔学習のまとめ〕
年表にまとめてみよう　地図にまとめてみよう

年表（書き込み用）　地図（書き込み用）

レース化にあることは冒頭で述べた。その意味で、新たな時代が要請するメディア・リテラシーを育成するために教科書を生かすか。旧時代のメディアのままにするか。これが教師の課題である。加えて、このことは、日本の速度よりも早く高度情報化社会への道を歩んでいる韓国もまた例外ではないことも付記しておきたい。

〈静岡大学教育学部教授〉

特集 今どんな情報活用能力を育てるか

子どもにどんな情報活用能力が必要か―と聞かれたら

一つのテーマを追いかけさせる＝田結荘哲治／〝情報知〟を身につけさせよう＝坂元　昂／「変だ」感覚・発信・整理技能＝柿沼利昭／情報の主体的活用能力＝……九森分孝治／「三つの偏見」から自由になっていること＝深草正博

情報活用能力の育成とメディア・リテラシーの問題……佐久間勝彦……四
メディアミックスの到来で社会はどう変わるか……多田　元樹……〇

主体性のあるメディアへの接し方を身に付けるために

新聞の読み方＝どこに注意すれば情報操作が見えてくるか……山根　栄次……四
雑誌の読み方＝どこに注意すれば情報操作が見えてくるか……佐長　健司……九
テレビの見方＝どこに注意すれば情報操作が見えてくるか……永石　一哉……四

■メディア・リテラシーを意識した指導のポイント

「写真」の見方＝メディア・リテラシーでどう変わるか……鈴木　健二……毛
「統計資料」の見方＝メディア・リテラシーでどう変わるか……馬場　一博……四
「挿し絵」の見方＝メディア・リテラシーでどう変わるか……松藤　司……四
「文章記述」の見方＝メディア・リテラシーでどう変わるか……吉川　幸男……五

【誌上検証・メディア・リテラシーの必要性を考える】

「太平洋戦争」の記述対比―書き手によってここまで違う？……馬居　政幸……毛

情報活用能力の育成＝どこに力点をおけばよいか

子供の追究力を伸ばす情報活用能力の育成を……羽豆　成二……八四
新聞を通して情報活用能力を育てる……山田　隆之……七〇
情報活用能力を生かし個に応じた指導を通して……舘山　石橋　裕　隆治……七六

文献案内

読んでおきたい「メディア論」の10冊……水越　敏行……八二

「情報をつくる体験」の指導＝楽しく役に立つ実践のヒント

現代っ子の情報発信術……土井　謙次……八四
NIEには支援の機会がいっぱい……竹澤　伸一……八九
情報を加工する楽しい活動……相澤　経利……九四

コピーしてすぐ使えるページ　情報活用能力をつけるファックス

朝日が勝つか読売が勝つかそれとも毎日か！……大田　公蔵……九九
ディベートワークで「情報活用」の学習を……岸尾　祐二……〇三
書評　「考える子ども」を育てる社会科の学習技能　有田和正著……山口　幸男……〇七
子どもとつくる問題解決学習　波　巌著……清水　毅四郎……〇七

連載講座

＊方法としての社会的世界の構成―社会科授業を再考するために……池野　範男……〇九
社会的判断と社会科教育の限界……藤岡　信勝……一五
―築地久子「公民館」の授業を事例に―
＊「近現代史」の授業をどう改造するか―教科書記述の問題点の分析を通して……12
「自由主義史観」とは何か……12
―三つの「近現代史」像③―自由主義史観(5)

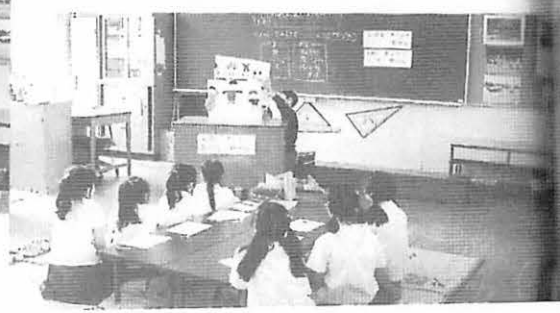
■〔誌上シンポジウム〕社会科の指導法・どこを変えるとよくなるか……24
提言：指導要録の記入と活用……北　俊夫……二二
意見：子どもの可能性を伸ばす評価を！……黒木　敏朗……二八

わたしの教材開発物語 ⑫

さとうきびの成長に必要なものは何か？……有田　和正……〇
※わが教室の〝社会科研究最前線〟⑫　愛知教育大学の巻……寺本　潔……二二
※わが県の情報・ここに〝この授業あり〟⑫　茨城県の巻……介川　文雄……二四

■一九九四年度「社会科教育」既刊特集主要目次……〇八

表紙絵＝升本　猛／扉・エピソードとクイズで〝身上調書〟―歴史人物42人：面白ミニ事典＝勝又明幸／グラビア・社会科授業に使えるフォトクイズ＝関　浩和／表3・4　歴史授業に役立つ〝モノ・科学〟＝西尾　一／表3下段　今月の教材単元一覧



小林修氏（水戸市三の丸＝茨城大学教育学部附属小学校）の授業

＊134ページに紹介があります。

教育科学

No.403
1995

社会科教育 3

1995年3月1日発行(毎月1回1日発行)32巻3号　昭和41年10月7日第三種郵便物認可

今どんな情報活用能力を育てるか

▶子どもにどんな情報活用能力が必要か―と聞かれたら――田結荘哲治・坂元昂他
▶情報活用能力の育成とメディア・リテラシーの問題――佐久間勝彦
▶メディアミックスの到来で社会はどう変わるか――多田元樹
▶主体性のあるメディアへの接し方を身に付けるために――山根栄次・佐長健司他
連載講座 池野範男・藤岡信勝・北俊夫・有田和正・寺本潔・介川文雄他

明治図書

1995年3月1日発行(毎月1回1日発行)32巻3号
昭和41年10月7日第三種郵便物認可

歴史授業に役立つ“モノ・科学” No.12

西尾　一（愛知県知多郡東浦町＝緒川小学校

原爆

原爆投下から50年。アメリカでは，広島に原爆を投下した「エノラ・ゲイ」展示をめぐって論争が起きました。原爆の切手発行も問題となりました。日本も，改めて原爆投下の目的やその惨状を見直してみるべきではないでしょう

▲原爆慰霊碑からの「平和の灯・原爆ドーム」

広島原爆についてのデータ

○1945年8月6日午前8時15分17秒
島上空580±20mで爆発。
・長さ3m，直径0.7m，重さ4tの通
“リトルボーイ”と呼ばれている原
・爆発の中心で摂氏1万1000度。
直下地表面で7000度以上。
爆心から500m以内で3000～4000
・秒速4.4km(時速1万5840km)の爆風
・1㎡あたり35tの風圧。
○広島に多大な被害を与える。
・31～32万人の人々と4万人を超え
軍人が，直接被害を受ける。
・広島市の建物の92%を焼失・破壊

1　2時間半後の出発

原爆投下の真の目的を改めて問い直すことは，真の平和を
めることにもつながるのではないでしょうか。

①原爆は，アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・イタリア・日本が同時期にその可能性
討していた。
○1945年7月16日午前5時30分
アメリカがニューメキシコで初めて原爆実験に成功。
○1945年7月16日午前8時
日本に投下する原爆第2号が，日本に向けて出発する。

→ 実験成功から，わずか2時
半後のことである。これは
何を意味することなのか？

②日本への原爆投下は，原爆の威力を調査する目的もあった。

（表3につづ

定価 590円
（本体 573円）

発行所＝明治図書出版株式会社
東京都豊島区南大塚2-39-5
郵便番号170
振替00160-5-151318

Printed in Japan

雑誌04427-03　T1004427030595